

先史農耕社会における富山湾資源利用史に関する基礎的研究

一富山県氷見市大境洞窟遺跡出土資料の再検討一

納屋内高史

1 はじめに

本研究は令和5年度～令和7年度において日本海学研究グループ支援事業の支援を受け、先史農耕社会というべき弥生時代を中心に、日本海沿岸でも富山湾沿岸の資源利用史を明らかにすることを目的とする基礎的な研究を行う。弥生時代は先史農耕社会といえ、弥生文化は「日本で食糧生産が始まってから前方後円墳が出現するまでの時代の文化」（佐原・金関 1975）と定義されている。本研究ではその時代の日本海沿岸における富山湾沿岸の資源利用の縄文以来の伝統とその変化を明らかにする。特に主たる分析対象を富山県氷見市大境洞窟遺跡出土資料とする。大境洞窟遺跡は国指定史跡、海辺の洞窟遺跡であり、学史的には大阪府国府遺跡とともに日本考古学黎明期に縄文／弥生の分層発掘をもって成果をあげた遺跡であり、日本国内で初めて調査された洞窟遺跡と評価されている。

本遺跡は、1918（大正7）年に東京帝国大学人類学教室の柴田常恵らにより調査され、資料は現在、東京大学総合研究博物館等に所蔵されている。しかし、大正時代の調査のため、今日的な視点からの資料の位置づけが充分になされていない現状にある。同資料を今日的な視点から分析、評価することは先史農耕文化における富山湾沿岸の資源利用史、つまりは日本海学を地域で大きく推進させることに繋がると考える。

そのため本研究は4つの方向性と目的をもち、研究を進める。

- 1) 大境洞穴における生業活動を復元するため、出土縄文・弥生骨角器を重点的に分析することで富山湾周辺の資源利用を明らかにする。
- 2) 大境洞穴出土動物遺存体は東大総合研究博物館及び氷見市教育委員会で所蔵される未同定の動物遺存体の同定を進め、縄文、弥生と先史時代の富山湾周辺の生態及び先史人の資源環境を明らかにする。
- 3) 上記1)・2)は生業活動の復元であるが、それに加え、同遺跡下層出土縄文土器・弥生土器付着炭化物について年代測定及び安定同位体分析を行うことで洞穴利用者の古食性の復元を進め、海洋性食料への傾斜度や時期ごと、時代ごとの古食性の変化を調べる。
- 4) 日本海学の視点から国指定史跡大境洞穴は富山県のみならず、日本の宝であることに間違いはない。『氷見市史 資料編5 考古』（2005）で資料は一定量図化されているが、未図化の資料も少なからずあり、その図化を進め、資料の共有化を図る。なお、上記2)の未同定動物遺存体の同定も資料の共有化の視点を含む。

2 東京大学総合研究博物館所蔵大境洞窟出土資料の調査・分析

令和5年度は東京大学総合研究博物館所蔵の大境洞窟出土資料の内、骨角貝製品と弥生

土器付着炭化物、氷見市立博物館所蔵大境洞窟出土動物遺存体資料の調査を行った。東京大学総合研究博物館所蔵の大境洞窟出土資料は、1918（大正7）年の柴田常恵らの調査（以下1918年調査）の際に出土した資料である。この内、骨角貝製品については、調査時の所見によれば、弥生時代～古墳時代の文化層とされる3層～5層とされ、同一層からは20体あまりの人骨が出土したとされている。『氷見市史 資料編5 考古』にて実測図が掲載され、資料化されているが、出土位置が不明であるほか、素材となった骨の種類が明らかでない等、不明確な部分の多い資料であった。そのため、調査は器種の再検討のほか、法量の計測、製作技法の観察、素材となった骨の同定を行った。

調査の結果、『氷見市史 考古編』に掲載されている89点の資料のうち、81点の資料を確認でき、新たに5点の未報告資料を確認できた。

器種構成については貝輪や玉類などの装身具が38点と最も多く、刺突具を中心とする狩猟・漁労具が24点と続き、ヘラや貝刃といった工具類は少ないことが確認された（表

表1：1918年調査出土骨角器の器種組成

分類	器種	資料数	合計	分類	器種	資料数	合計
狩猟・漁労具	ヤス状刺突具	3	24	玉類	貝玉	6	13
	ヤス状刺突具?	1			管状骨角製品	3	
	刺突具	9			垂飾	1	
	刺突具/動物遺存体?	1			垂飾?	1	
	銚	1			その他装身具	髪針	
	釣針	3		刺突具(髪針?)		11	
	逆刺	4		櫛		1	
	疑似餌	1		不明装身具(腰飾?)		2	
	鏃?	1			ヘラ状貝製品	1	
工具	刺突具(ヘラ)	2	5	儀器	骨槍	2	7
	貝刃?	3			骨刀?	1	
貝輪	貝輪	7	9		弭形骨角製品	3	
	貝輪未製品	1			骨杖?	1	
	貝輪未製品?	1		製品素材	製品素材?	2	4
玉類	歯玉	1	加工痕のある骨角片		2		
	骨玉	1		不明	棒状加工品	1	1
					合計		79



釣針

疑似餌

写真1：1918年調査出土の釣針と疑似餌

1)。このことは、弥生～古墳時代に洞窟が墓域としても用いられていたことを反映していると考えられる。狩猟・漁労具に注目するとヤスとして用いられたと考えられる細身の刺突具の他は鏃が1点含まれる以外、釣針や疑似餌、銚が出土しており、ほとんどが漁労具で占められる。釣針は出土しているものは皆針部のみの出土であるが、残存部のみで5cmを超える大型のものであり、外洋性の大型魚類を狙ったものであった可能性が考えられる（写真1）。

また、疑似餌については、これまで垂飾状骨角製品とされていたものであるが、形態的に他遺跡で弥生～古代のカツオ・マグロ漁用の疑似餌として報告されているものに類似すること、実見の結果、資料の中心軸に沿って穿たれた穴に鏑状のもの付着が見られることから、カツオ・マグロ漁用の疑似餌と考えられる（写真1）。カツオ・マグロ漁用の疑似餌は、弥生時代以降に出現し、南関東や遠州灘沿岸、紀伊半島南部などの主に太平洋側の外洋に面した遺跡から出土する資料であり、日本海側の遺跡からの出土例はこれまでに報告されていない。その為、本資料の存在は、弥生時代以降の大境洞窟周辺でカツオ・マグロ漁がおこなわれていたことを示すとともに、太平洋側の外洋に面した地域からの文化の流入があった可能性を示すといえる。これらのことから、出土した骨角製漁労具から見た場合、弥生～古墳時代の本遺跡では、沖合でマグロ等の大型魚類を狙った漁労活動が盛んに行われていたと考えられ、それは太平洋側の外洋に面した地域の文化の影響を受けていた可能性がある。

製品素材については、今回の調査で狩猟・漁労具と工具、儀器でニホンジカの角（以下鹿角）や中足骨、ニホンジカまたはイノシシと見られる大型獣の四肢骨に偏り、装身具はバリエーションが豊富になる傾向が明らかとなった（表2）。特に狩猟・漁労具については、24点中10点が鹿角製、13点が大型獣の四肢骨を中心とする骨製であり、骨製の比率が高い。骨角製狩猟・漁労具の素材は、縄文時代では全国的には鹿角製が高い割合を占める場合が多いが、小竹貝塚や上久津呂中屋遺跡等の富山湾沿岸の遺跡では骨製の比率が高い傾向が見られる。本遺跡の骨角製狩猟・漁労具の素材選択に見られる傾向は、縄文時代以来の伝統が弥生時代以降も引き継がれていたことを示すものといえるだろう。

装身具の素材については、鹿角や大型獣の四肢骨以外は、アワビ類やベンケイガイ、マクラガイ等の遺跡付近の海岸や沿岸部で獲得可能なもののほか、アホウドリ類の可能性の考えられるものやハンドウイルカ類の可能性の考えられるものなど沖合の洋上での捕獲や沖合からの追い込みが必要になると考えられるものが含まれ、この点は沖合での漁労活動が盛んだったという骨角製漁労具の器種構成から見た推定と付合する。

また、今回の調査で貝輪の中にオオツタノハ製のもが見つかった点は、注目される（写真2）。オオツタノハは伊豆諸島南部や大隅諸島などの南方の限られた海域にしか生息しない貝類である。先に指摘した疑似餌の存在とともに太平洋側の地域との交流を物語るものといえるだろう。

この他に所蔵されている出土弥生土器について、炭素・窒素安定同位体分析用の土器付着炭化物の採取を行った。これについては、現在、分析を依頼しており、次年度以降に結

果を公表してゆく予定である。

表 2：1918 年調査出土骨角器の素材の種類組成

分類群	種類	狩猟・漁労具	工具	貝輪	玉類	その他装身具	儀器	製品素材	その他	総計
陸獣	ニホンジカ 角	10				3	4	1		18
	ニホンジカ 角?					1				1
	ニホンジカ 角～前頭骨角座R?						1			1
	ニホンジカ 前頭骨R							1		1
	ニホンジカ 尺骨R		1							1
	ニホンジカ 中手骨/中足骨	4					1			5
	ニホンジカ 中足骨R	1								1
	イノシシ 下顎犬歯L(メス)					1				1
	イノシシ 下顎犬歯R							1		1
	イノシシ 犬歯					1				1
	イノシシ 腓骨R							1		1
	大型獣 四肢骨	6	1				1		1	9
	大型獣 肋骨	1								1
	オオカミ? 上腕骨L					1				1
海獣	中型イルカ類 歯				1					1
	海獣類?						1			1
鳥類	アホウドリ? 尺骨L				1					1
	鳥類 尺骨				1					1
魚類	マグロ類? 棘?					3				3
骨	骨	2				5				7
	骨?					1				1
	角/骨(骨?)					1				1
貝類	アワビ類 殻		2							2
	アワビ類? 殻		1		1					2
	イワガキ 右殻			1						1
	オオツタノハ? 殻			2						2
	フネガイ科(サトウガイ?) 殻			1						1
	ベンケイガイ 殻			3		1				4
	マクラガイ 殻				6					6
マツバガイ 殻			2						2	
総計		24	5	9	13	16	7	4	1	79



写真 2：1918 年調査出土のオオツタノハ製貝輪

3 氷見市立博物館所蔵大境洞窟出土動物遺存体の調査

上記の骨角器の調査とともに、素材となった骨角の入手過程や捕獲対象となった種類を検討するため、氷見市立博物館所蔵の動物遺存体の調査を行った。対象とした資料は氷見市教育委員会により 2004 年に行われた大境洞窟保全工事に伴う確認調査（以下 2004 年調査）で出土した動物遺存体である。発掘調査時に縄文～弥生・古墳時代の文化層から出土したもので、洞窟が生活場所として利用されていたときに、食料や製品素材として利用された後の生活残滓と考えられる。分析は行われているものの未報告資料であるが、氷見市教育委員会の厚意により調査する運びとなった。

調査の結果、資料はある程度層位的に採取されていることが明らかになるとともに、イノシシとニホンジカが主体をなし、それ以外に哺乳類はアシカ類、イルカ類、ノウサギ、イヌが、鳥類はアホウドリ類、カモメ類、アビ類が、魚類はハタ類、マダイ、カサゴ類、サバ類、スズキ、フグ類が出土していることが明らかとなった。特にイノシシ・ニホンジカについて、イノシシは全身にわたる部位が出土しているのに対し、ニホンジカは頭部と主要四肢骨に偏る傾向が見られた。このことはイノシシとニホンジカで遺跡への搬入形態が異なり、ニホンジカは角を含む頭部や四肢等の製品素材や食料資源として有用な部分のみが搬入されていたことを示唆する。また、魚類については、骨角貝製品の分析で利用の示唆されたマグロ類等の外洋性大型魚類の出土は見られなかった。

本資料については、今年度、諸般の事情により十分な調査を行うことが叶わなかったが、本遺跡を理解する上で重要度の高い資料であることから、次年度以降、資料の検討を更に行い内容を公表してゆきたい。

おわりに

今年度の研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- ① 東京大学総合研究博物館所蔵骨角貝製品の調査を行った結果、装身具と狩猟・漁労具が多くを占めることが明らかとなり、弥生～古墳時代に本遺跡が墓域としても用いられていたことが反映されていると考えられた。狩猟・漁労具の分析や素材となった種類の同定を行った結果、マグロなどの外洋性大型魚類の利用が考えられたほか、太平洋側との文化的交流が示唆された。
- ② 氷見市立博物館所蔵動物遺存体の調査を行った結果、イノシシ・ニホンジカが主体を占め、カモメ類などの海鳥やハタ類、フグ類等の岩礁・沿岸性の魚類が含まれ、マグロ類等の外洋性大型魚類は見られないことが明らかとなった。

今年度の研究では、1918 年調査で出土した骨角貝製品について、その全容を把握することができたものの、製作技法や形態面からの時期や系譜等の検討を十分に行うことができなかった。また、2004 年調査出土動物遺存体の調査の結果、出土骨角貝製品から推定される漁労活動と生活残滓から推定される漁労活動との間に齟齬が見られることが明らかとなった。これらの点については、次年度以降の研究で更に検討を行ってゆきたい。

《参考文献》

- 大野究 2002『大境洞窟をさぐる』氷見市立博物館
同 2008「遺構確認調査」『国指定史跡 大境洞窟住居跡 保全整備事業報告書』氷見市教育委員会
同 2018『大境洞窟・朝日貝塚 100年』氷見市立博物館
忍沢成視 2011『貝の考古学』ものが語る歴史 22,同成社
金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究 縄文編Ⅰ』慶友社
同 1986『骨角器の研究 縄文編Ⅱ』慶友社
佐原眞・金関恕 1975「米と金属の世紀」『稲作の始まり 古代史発掘 4 弥生時代』講談社
島田美佐子・朝田亜紀子・町田賢一編 2013『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告-能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 10-』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 55,財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
中村勉 1993「「角(ツノ)」とよばれる釣針について--三浦半島出土の資料を中心として」『考古学研究』40-2,考古学研究会
氷見市史編纂委員会編 2005『氷見市史 資料編 5 考古』氷見市
氷見市文化財保存会編 1957『大境洞窟遺跡と朝日貝塚』氷見市文化財保存会
町田賢一編 2014『小竹貝塚発掘調査報告-北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 10-』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 60, 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所